

# 芭蕉研究

——その発句における笑——

桜井 緑

松尾芭蕉が俳諧作者としてまず身につけたのは、いわゆる貞門及び談林の手法である。これらの手法はいずれも遊戯性に富み、言葉の遊びを主とする知的な創作方法で、その作品には諧謔、洒落、諷刺などが織り込まれ、笑の充満している世界と言えるのである。したがって芭蕉の修業時代における作品に見出せるおかしみは、その大方が知的意図的なものである。

芭蕉の作品にあらわれたおかしみを抽出するにあたって、まず第一の課題となるのは、この修業時代すなわち寛政、延宝、天明年間に修得した貞門及び談林の手法が、晩年に至るまでの作品にどのような形で跡を残しているかを追究することである。更に第二の課題は芭蕉自身が開拓したと考えられる笑の追究である。これは貞門及び談林の笑とは区別出来るもので、主として晩年の蕉風の作品の中に見出せる笑である。貞門及び談林の笑を知的なお

かしみとするならば、これは情的なおかしみと言うことができる。また前者が詞のおかしみであるのに対し、後者は心のおかしみであると言うこともできる。そこでこの両面から芭蕉俳諧の笑を追究して行くことにする。

## 一 詞のおかしみ

芭蕉が用いた貞門及び談林俳諧の手法は、凡そ次の三つに分けて検討することができる。

第一は詞の洒落によつて成立している句である。これは掛詞、縁語、数詞のおもしろみなど、詞そのものに対する興味によつて詠まれるものである。第二は見立て、または譬喩による作法である。これはある事象を他の事象に譬える手法で、その譬えが人の意表をつく面白いものであるところにその価値が存する。見立て

とは、譬えられるものも句の中に詠まれている場合であり、譬喩はそこから一步進んで何かを暗示するのである。後者は、前書によつて譬喩の句であることを知る場合が多い。第三は借辭またはおもかげによる作法である。詩歌、物語、謡曲、小歌などの詞を借り、あるいはそのおもかげを詠み込んで、おかしみを出す手法である。古典の詞章を借りる場合には、その詞章を一字も変えず使う時と、適當に振<sup>もじ</sup>つて使う時とがある。

次にこの三手法について、蕉風確立期と言われる貞享年間から元禄七年に至るまでの発句を中心に、その消長を辿つて見る。

### (1) 詞の洒落

掛詞、縁語、数詞のおもしろみなど、詞そのものに対する芭蕉の興味は、修業時代は言うまでもなく、貞享を経て元禄七年に至るまで続いている。貞享以後の発句から七十句以上を数えることができる。そのうちのいくらかを例示すると、

#### 掛詞

- かちならば杖<sup>つ</sup>き坂<sup>さか</sup>を落馬<sup>らくば</sup>哉  
(貞享四年 笈日記)
- はだかにはまだ衣<sup>え</sup>更<sup>さら</sup>着<sup>き</sup>のあらし哉  
(〃 五年 其袋)
- いざよひもまだ更<sup>さら</sup>科<sup>か</sup>の郡哉  
(〃 〃 木曾の谿)
- 象潟や雨に西施がねぶの花  
(元禄二年 奥の細道)
- 蛤の生きるかいあれとしの暮  
(〃 五年 薦獅子)

菊の香にくらがり登る節句かな

(元禄七年 菊の香)

#### 縁語

笠<sup>かさ</sup>寺<sup>てら</sup>やもらぬ窟<sup>くつ</sup>も春<sup>はる</sup>の雨<sup>あめ</sup>  
留守<sup>るす</sup>のまにあれたる神<sup>かみ</sup>の落葉<sup>らくえつ</sup>哉  
此宿<sup>このしゆく</sup>は水鶏<sup>みづけい</sup>もしらぬ扉<sup>ひら</sup>かな  
鶏頭<sup>けいとう</sup>や雁<sup>かり</sup>の來<sup>き</sup>る時尙<sup>ときなほ</sup>あかし  
老<sup>お</sup>の名<sup>な</sup>のありともしらで四十<sup>よじ</sup>から  
うぐひすや竹の子<sup>たけのこ</sup>藪<sup>やぶ</sup>に老<sup>お</sup>を鳴  
瓜<sup>うり</sup>の皮<sup>かわ</sup>むいたところや蓮<sup>れん</sup>臺<sup>たい</sup>野

#### 数

- 奈良七<sup>ならしち</sup>重七<sup>ちゅうしち</sup>堂伽藍<sup>どうがらん</sup>八重<sup>やえ</sup>ぎくら  
夏來<sup>なつきた</sup>てもただひとつ葉<sup>は</sup>の一葉<sup>いちえつ</sup>哉  
月影<sup>げいよう</sup>や四門<sup>しもん</sup>四宗<sup>ししう</sup>も只<sup>ただ</sup>一つ  
九<sup>く</sup>たび起ても月の七<sup>しち</sup>ツ哉  
七<sup>しち</sup>株<sup>くさ</sup>の萩<sup>はぎ</sup>の千<sup>ち</sup>本<sup>ほん</sup>や星<sup>ほし</sup>の秋  
これらの句の遊戲的手法は、芭蕉が貞門及び談林俳諧の中に育ち、晩年に至るまでもその作風を残していることを如実に示している。特に注目したいのは、旅を住とした芭蕉が行脚の先々の地名、名所に興味を持ち、それを詠み込んだ句を多く作っていることである。しかも名所として通っているものばかりではなく、あ
- (貞享元年 宇陀法師)  
(〃 五年 曠野)  
(〃 〃 更科紀行)  
(元禄四年 奥の細道)  
(〃 五年 韻塞)
- (貞享四年 熱田三歌仙)  
(元禄元年 小文庫)  
(〃 四年 笈日記)  
(〃 六年 續猿蓑)  
(〃 〃 〃)  
(〃 七年 炭俵)  
(〃 〃 笈日記)

まり知られていない面白い地名をもしばしば起用していることは、貞門談林には見られない彼の独自性を示すものである。ことに、奥の細道の旅においては、この行脚が芭蕉にとつては未踏のものであり、また古い名所を訪ねることが一つの目的であつた為に、この興味は一層強いのである。すなわち『奥の細道』に記された五十二句中十九句に地名が詠み込まれている。そしてこの十九句中、掛詞、縁語などの知的作為をこらして詠まれているものは、

あらたふと青葉若葉の日の光

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

笠嶋はいづこ五月のぬかり道

蚤虱馬の尿する枕もと

雲の峰幾つ崩れて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

あつみ山吹浦かけて夕すずみ

汐越や鶴はぎぬれて海涼し

しほらしき名や小松ふく萩すゝき

の九句である。

以上示した句は、芭蕉の作品の中で高く評価されているものばかりではない。むしろ知的作為が多く詩情の乏しいものとして、言わば駄作とされるものが多い。しかし芭蕉の俳諧に絶えず附き

まとうこの一面、すなわち知的才覚と諧謔性とを無視しては、正當に芭蕉を理解することは不可能ではなからうか。

## (2) 見立てと譬喩

見立ての手法も最晩年に至るまで見出せる。例えば元禄七年九月八日に伊賀を立つて奈良に重陽の日を迎えた芭蕉は、

菊の香や奈良はいくよの男ぶり

と、菊香る奈良の旧都を伊勢物語の昔男の男ぶりに見立てたのである。同時の作、

菊の香や奈良には古き佛達

とは凡そ趣の異なる詠みぶりである。無論後者の方が詩情が豊かで遙かに高く評価されるものである。しかし、この見立ての句が生まれたところに、句を楽しむ機智的な資質を見ることができる。同様に、

秋海棠西瓜の色に咲きにけり

(元禄三年 東西夜話)

と秋海棠の花を西瓜の色に見立て、

松杉をはめてや風のかはる音

(〃 七年 笈日記)

と、小倉山の松杉に吹く風の音を「松杉をはめてや」と取りなす所にも、機智に富んだ諧謔性が見られるのである。その他、

わた弓や琵琶になぐさむ竹のおく

(貞享元年 甲子吟行)

冬しらぬ宿やもみする音あられ

(〃 〃 夏爐一路)

月に名を包みかねてやいもの神

(元祿二年 晝寝の種)

ひばりなく中の拍子や雉子の聲

(〃 三年 猿蓑)

風に匂ひやつけし歸花

(〃 四年 後の旅)

などが面白い。

これら見立ての句は、初期においては単におかしみを出すための手法であつたが、貞享を経て元祿年間に入ると、ただその面白さのみに終始せず、讃辞や謝意を含む挨拶の句となつてゐる。

ひらひらとあぐる扇や雲の峯

(元祿四年 笈日記)

は、「本間氏主馬が亭にまねかれしに太夫が家名を稱して吟草」という前書が示すように、能太夫本間主馬の妙技を稱<sup>たた</sup>えると共にその扇の上る如く家名の上る事を賀した句である。したがつて、見立ての手法は単に知的なおかしみを狙うためのものではなくなつて來てゐる。しかし芭蕉の知的才覚が秀れていることを、この手法もまた実証する。

譬喩の句は、見立てと同様に知的興味によつて生まれると言えるが、おかしみを狙う句は少く、挨拶としての人物賞讃、別離の情などの句が多く、芭蕉独自の手法となつてゐる。しかし、おかしみのある句も見出せる。

蝙蝠も出よ浮世の華に鳥

(元祿六年 西華集)

は、旅立つ僧への餞別の為に作つた句で、蝙蝠は黒衣を身にまと

つた僧を譬えたのである。ここには諷刺的な、しかも親しみの籠つたおかしみがある。

はつむまに狐のそりし頭哉

(元祿七年 末若葉)

は、「二月吉日とて是橘が剃髮入醫門を賀す」と前書にある様に、其角の僕は吉が剃髮する時の句である。折しも初午の頃であつたので、「狐のそりし」と機智を働かせたのである。この他に

常陸下向に江戸を出る時送りの人に

鮎の子の白魚送る別かな

(元祿二年 伊達衣)

艸庵に桃櫻あり、門人に其角嵐雪あり

兩の手に桃とさくらや草の餅

(〃 六年 桃の實)

洒堂が予が枕もとにて軒をかきしを

猪の床にもいるやきりぎりす

(〃 七年 蟋蟀卷)

などがあるが、これらには明かに芭蕉の諧謔性が示されている。このように芭蕉の譬喩は、その全てがおかしみを感じさせるものではないにしても、彼の機智的な才覚は見逃すことのできない要素となつてゐる。

(3) 借辞とおもかげ

芭蕉の発句は約一千を数えることができるが、その中、何らかの意味で出典を持つことを指摘されるのはその二割近くである。これらの句は、初期においては原典の詞を借り、おもかげを取る

ことによりおかしみを生み出そうとしているが、やがて原典の精神を生かし、故人を慕うことを主眼とする方向へ移行している。しかし、おかしみを出さんとする試みも晩年までなされている。

櫻より松は二木を三月越し

(元禄二年 奥の細道)

は次の古歌の詞を借りている。

武隈の松はふた木を都人いかゞと問はゞみきとこたへむ

橘季通 (後拾遺和歌集第十八)

武隈の松は二木を三きと言へばよく讀るには非ぬなるべし

僧正深覺 (同第二十 誹諧歌)

これは「松は二木を三き」の部分をもそのまま借りているのであるが、芭蕉が俳諧をたのしんでいる態度がうかがわれるのである。また、

御命講や油のやうな酒五升

(元禄元年 小文庫)

は、日蓮上人御報書の、「新麥一升等三本油のやうな酒五升南無妙法蓮華經と回向いたし候。」によつてゐる。この書簡は芭蕉歿後板行せられた『風俗文選』に収録されているが、出所不明で、偽作とも考えられるが、このような文書に目を付けた所に芭蕉の知的才覚の鋭さと、機智的な着想とがあつたと思われる。この他の作では

梅が香やしらいおちくば京太郎

(元禄四年 柿表紙)

幾霜に心ばせをの松かざり

(貞享三年 其角歳旦帳)

が面白い。

また原型の詞を振つて用い、そこにおかしみを出しているものがある。

あこくその心はしら梅の花

(貞享五年 三冊子)

は、紀貫之の幼名阿古久曾と、彼の歌「人はいさこゝろもしらず故郷は花ぞ昔の香ににほひける」とを一まとめにして、「あこくその心はしら」と洒落たのである。

菊の後大根の外更になし

(元禄四年 四山集)

は唐の元稹の絶句「秋叢遶舍似陶家、遍遶籬邊日漸斜、不是花中偏愛菊、此花開後更無花」の結句を、「大根の外更になし」と振つたのである。この句はおかしみを感じさせるものではあるが、その表現には実感があり、単なる詞の上の遊びではないところがある。しかし、いずれにせよこれらの句は芭蕉の諧謔性をよく示している。

おもかげ取りの句は原型の内容を踏まえているところにおかしみが見出されるものである。例えば、

狂句木枯の身は竹齋に似たるかな

(貞享元年 冬の日)

は、仮名草子『竹斎』の主人公の風姿を踏まえ、芭蕉自身に比べているのである。したがつてこの句のおかしみを解するためには、

『竹斎』を知らなければならぬ。また

早苗にもわがいろ黒き日數哉

(元禄二年 雪丸げ)

は、『古今著聞集』の

能因は、いたれるすきものにてありければ

都をばかすみとともに立ちしかど秋かぜぞふく白川の關

とよめるを都にありながらこの歌を出さんことを念なしと思ひて人にもしらせず、久しく籠り居て色をくろく日にあたりなし  
て後、陸奥國の方へ修行の次によみたりとて披露したり。

(卷第五)

をおもかげにしている。すなわち、「わがいろ黒き」は、「いたれるすきもの」の能因の仕業をおもかげにしている故に生きているのであつて、芭蕉の機智的な表現と見ることが出来る。

このようなおもかげ取りの句は、おもかげとなつてゐるものを知らなければ、そのおかしみを解することができない。したがつて詩としての独立性が乏しく、遊戯的な傾向が強いと言える。芭蕉が遊戯的手法を好んでいることが、ここからも窺えるのである。

芭蕉の発句は、以上の例によつて明かなように晩年に至るまでその遊戯的な手法を捨ててはいない。これは単に修業時代の影響の残影であると言うよりは、むしろ芭蕉の遊戯性を好む資質によ

るのではなからうか。諧謔味に富んだ『貝おほひ』を認めた芭蕉の知的才覚が、後々までも彼の作品にこの種の彩を見せるのは当然のことに思われる。このような知的おかしみを主とする句は、今日においてはあまり高く評価されない。従つて芭蕉の遊戯的手法はややもすれば黙殺されがちであるが、芭蕉俳諧の一特質として十分に肯定されるべきである。

ところで芭蕉は、このような貞門談林の傾向を引く知的興味に勝つた句に対し、いかなる考えを持つていたのであろうか。芭蕉は蕉風以前の手法を決して高く評価してはいない。「誰をさして古人といひ、何を求めてか古風をしたはむ」(『千鳥の恩』)と強い自信のほどを示している。また芭蕉は、門弟に句作法を説く場合に、「心の作はよし、詞の作好むべからず」と、詞の作、すなわち表現技巧を主とした作法を否定している。そして「かりにも古人の涎をなむることなかれ」(『蕉門俳諧語録』)と戒めている。

ところが、芭蕉最晩年の元禄七年には、

晝顔に晝寝せうもの床の山

さざなみや風の薫の相拍子

菊の香にくらがり登る節句かな

など、「詞の作」と言えるような句が少し残つていて、「心の作

よし、詞の作好むべからず」という彼の言葉と矛盾する。これは、理論と實際とのずれであろうが、ここに芭蕉の資質的な好みが働いていると思われる。次に示す『くろさうし』の一節はこの資質と詩精神との葛藤を語るものとして面白い。

師のいはく、手のうちに蟬をにぎりて鳴する事を宜きものと句にしばらくとりなやみ侍る也。古みをとらんとせしとおそろしきものにあひたるやうに語出られし也。

芭蕉は、手の中に蟬を握つて鳴かせる事の感觸のおもしろ味に心を引付けられたのであろう。しかし、これは特殊な素材に凭れた知的興味があるのみで、そこから豊かな詩情や深い感動は生れて来ない。この事を気付いた芭蕉は、「古みをとらんとせし」と恐しいものに会つたように語つたというのである。ここに芭蕉の嗜好と高い詩精神との葛藤を見るのである。

先に示した句によつて明らかなように、芭蕉は本来知的興味が強く、才覚の効く、機智に富んだ資質を持つていたと考えられる。しかし、それは彼の目差す高い詩精神、いわゆる風雅の誠と、ややもすれば相容れないものである為に、弛まざる努力によつて少しずつ洗い流され、元禄六七年には、僅かに十指を折つて足りるほどの句数になつてしまつた。しかし、芭蕉発句における笑の一要素として、彼の資質的な諧謔性を認めなければならない。芭蕉

の明快な機智からくる詞の洒落や奇抜な譬喩は、晩年まで失われず、芭蕉俳諧の一特質となつていたのである。

## 二 心のおかしみ

ここに考察の対象とした芭蕉の発句約一千の中、心のおかしみを具現していると思われるものは約三百句を数えることができる。この約三百句を、笑の対象、すなわち句の素材によつて分類すると、芭蕉自身の生活感情を素材としているもの、世態人情を素材としているもの、自然の風物を素材としているものの三類に分けることができる。

### (1) 生活感情

芭蕉の発句に於ては、生活感情が最も笑の対象となりやすく、約百四十句を数えることができる。この類の句の特質は、第一に傍觀的態度を取つてゐることである。傍觀的態度はおかしみの生れる一要素である。すなわち対象とある距離を保ち、決してその中に巻き込まれることなく、觀照的に静かに、あるいは冷やかに対象を眺めることによつて笑が生れると考えられるのである。芭蕉の場合には彼自身までもが傍觀的に突き離して眺められている。そこに自己の風姿、感情を笑う態度が生れてくるのである。

年くれぬ笠着て草鞋はきながら

(貞享元年 甲子吟行)

髪はえて容顔蒼し五月雨

(貞享四年 續虚栗)

寺にねて誠がほなる月見哉

(〃 〃 〃)

などは、あたかも他人を描写する如く自己を見つめている。この傍観的態度は、単に生活感情の句のみならず、心のおかしみの句全てに言えることである。

第二の特質は、自嘲句の多いことである。

月雪とのさばりけらししの昏

(貞享三年 續虚栗)

不性さやかき起されし春の雨

(元禄四年 猿蓑)

能なしの寝たし我をぎやうくし

(〃 〃 嵯峨日記)

ともかくもならでや雪のかれ尾花

(〃 〃 北の山)

ふぐ汁や鯛もあるのに無分別

(〃 六年 芭蕉句選拾遺)

分別の底たつきけり年の昏

(〃 〃 翁草)

などがその代表的なものである。俳諧にのみ生きる自己の姿を、「のさばりけらし」と嘲弄し、「能なし」「無分別」ときめつけ、不精になつた老懶の自らを率直に、「不性さや」と笑い、旅の涯にも死なず江戸へ戻つた自らを、「ともかくもならでや」と自己に問うて笑うのである。いずれも傍観的な調子である。芭蕉の嘲笑は自己を笑いながらもその心底では笑われる自己を肯定し、笑われる自己を敢えて矯正しようとしてはいない。その為に嘲笑の持つ悲痛な感が希薄になつている。自己の絶対的な優越感がその

嘲笑に明るさをもたらしているのである。

またこの嘲笑句には芭蕉の貧苦を表現したものが多いが、芭蕉は貧しきをよしとし、貧苦を楽しみと感じていたので、おのずから折にふれてそれを嚮うことになつたのであろう。

夏衣いまだ虱をとりつくさず

(貞享二年 甲子吟行)

人に家をはかせて我は年忘

(元禄三年 猿蓑)

夜着一つのり出して旅ね哉

(〃 四年 茶の草子)

等々、貧を笑い楽しんでゐる。

芭蕉の自嘲句は、大体において深刻あるいは辛辣なものではなく、自己の生き方を肯定し、明るく笑うところにその特色があると言えよう。

第三の特質は童心の笑が見られることである。

初雪や幸ひ菴に罷有る

(貞享三年 續虚栗)

かぞへ來ぬ屋敷くしの梅やなぎ

(元禄五年 一字幽蘭集)

面白し雪にやならん冬の雨

(貞享四年 千鳥掛)

傘に押わけみたる柳かな

(元禄七年 炭俵)

夕顔にかんびやうむいてあそびけり

(不明 有磯海)

などの句におけるおかしみは、子供のように無邪氣な喜びの感情から生れ出ている。「初雪や」の句は、前書「我くさのとはつゆき見むとよそに有ても空だにくもり侍れば、いそぎかへること



あまたたびなりけるに師走中の八日はじめて雪降りけるよろこび」  
によつてより明らかなように、草庵の初雪を見たいとかねがね  
思つていたところ、幸いにも思いが叶つた時の喜びの氣持である。

「面白し」の句も、冬の雨が雪になる氣配に心を奪われるところ  
は子供のようには純粹である。「屋敷／＼の梅やなぎ」を数え歩い  
たり、傘でそつと柳を押し分けてみたりすることは、屈託のない  
子供の心そのままである。しかも、これらの句にはほとんど技巧  
らしい技巧が加えられず、率直に、ただそのままに表現されてい  
る。それ故に、素直な明るい笑が生れて来るのである。『三冊  
子』に「俳諧は三尺の童にさせよ」とある如く、芭蕉は子供の純  
粋な感受性を尊重している。芭蕉自らも清純な心を忘れぬよう努  
力したことが、これら童心の句によつて窺われるのである。

これらの句には、貧苦を忘れた真に明るいほえみが感じられ  
る。それは芭蕉の心が、時には煩わしい生活を超越して、のびの  
びと遊び得たからであろう。そしてこの笑を生み出すものは、彼  
の明朗な資質と、彼に何らかの感化を与えている禅の境地ではな  
かろうか。童心とは言ふものの、本当の子供の感情よりは一段高  
いものであると思われる。

第四の特質は、願望及び呼掛けの発想をなす句が笑と密接な関  
係を有していることである。

願望体の句は、芭蕉の心の遊びであり、風狂精神の高まりによ  
つて生ずるものである。

酔て寝むなでしこ咲る石の上

(元禄四年 栞集)

三井寺の門たたかばやけふの月

(〃〃 雜談集)

のみ明て花生にせん二升樽

(〃〃 芭蕉句選拾遺)

などのやや氣負い立つた口調、あるいは、

冬籠りまたよりそはん此はしら

(〃 元年 曠野)

庭はいて出ばや寺にちる柳

(〃 二年 鳥の道)

こもり居て木の實艸のみひろはゞや

(〃〃 後の旅)

などの心を弾ませ、軽く打ち興じている調子がおかしみを感じさ  
せるのである。芭蕉の句のおかしみの一つは、この心の弾みと氣  
合によつていふと考えられる。これは自らのたずきをも忘れ得  
る風狂児が生み出すおかしみである。そしてこの一連の句にも芭  
蕉の明朗な資質を見ることができ。

呼掛けの句は願望体と同じく心の弾みと氣合とがおかしみを生  
み出している。この中で最も多いのは挨拶としての呼掛けである。  
挨拶の句は、その時節とその座の氣分に相應しい即興詩でなくて  
はならないが、芭蕉はこれと呼掛けの発想で巧みに行つてい。

市人にいで是うらん笠の雪

(貞享元年 笈日記)

君火をたけよきもの見せむ雪まるげ

(〃 三年 續虛栗)

いざ行かんゆきみにころぶ所まで

(貞享四年 花摘)

初眞桑四にやわらん輪に切ん

(元禄二年 浮世の北)

いざ子どもはしりありかん玉霰

(〃 〃 木葉集)

などはその場に相応しく、しかも明るく笑わせて一座の気分を和げる調子を持つている。さらに、

義虫の音を聞きに來よ艸の庵

(貞享四年 續虚栗)

うき我を寂しがらせよ閑古鳥

(元禄四年 嵯峨日記)

けふばかり人も年よれ初時雨

(〃 五年 續猿蓑)

秋深き隣は何をする人ぞ

(〃 七年 笈日記)

などの呼掛けは、同じく即興的な口調でおかしみを感じさせるものがあるが、その底には芭蕉の寂寥感、孤独感があつて、人をなつかしき呼掛けずにはいらぬ心境から生れたものである。この寂しみの中のおかしみは芭蕉俳諧特有のものと云えるのである。

## (2) 世態人情

世態人情を素材とした句において、芭蕉が好んで詠んでいるのは貧しくわびしく生きる素朴な人間の姿である。市中の人の姿をとらえて、

いもだねや花の盛に賣ありく

(元禄三年 岨の古畑)

こがらしや頬腫痛む人の顔

(〃 〃 猿蓑)

節季候を雀のわらふ出立かな

(〃 五年 深川)

ゑびす講酢賣に袴着せにけり

(元禄六年 續猿蓑)

煤はきは己が棚つる大工かな

(〃 〃 炭俵)

と詠じ、あるいは山野の人影をとらえて、

山賤のおとがい閉るむぐらかな

(貞享二年 續虚栗)

晝顔に米つき涼むあはれ也

(貞享四年 續の原)

賤の子やいねすりかけて月をみる

(〃 〃 鹿島詣)

はたる見や船頭酔ておぼつかな

(元禄三年 猿蓑)

鞍壺に小坊主乗るや大根引

(〃 六年 炭俵)

などを作っている。これらの句のおかしみは、芭蕉の貧しい者に対する親近感によつて生じている。すなわち芭蕉の彼等に向ける眼差しには、常に親しみと愛着とが込められている。しかも彼等とはやや距離を保つていて、彼等の感情の中に入り切つてしまうことはない。それ故に芭蕉は客観的に機智を働かせて彼等を描くことができるのである。この世の貧しき生業に対する芭蕉の同情と愛着とは、彼の人生観に基くものと言えよう。「舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらへて老をむかふる者は、日々旅にして旅を栖とす」と表わしているように、人生を旅と思い、無常と感じる芭蕉にとつて、この世の榮華繁榮は虚しいものである。したがつて、日々のたずきを辛うじて得て暮すこれら貧しい者たちは、芭蕉にとつて本当に親わしくなつかしい存在であり、人生の

伴侶であることを感じさせるものなのである。芭蕉の中にこの共感があつてこそ、暖みの籠つた描写がおこなわれ、おかしみが生じて来るのである。

さらにこれら世態人情の句を芭蕉の資質的な面から見ると、着想及び発想法の機智的な働きが注目される。

鞍壺に小坊主乗るや大根引

は、さりげない表現ではあるが鞍壺にちよこんと乗る小坊主と大根引との取合せが実に楽しい。

こがらしや頬腫痛む人の顔

は、頬が腫れて痛んでいる人の顔を容赦なく捕えたところに明るなおかしみがある。

このように面白い着想を把み得たのは、芭蕉の明快な機智的資質によるものであらう。芭蕉のものの見方は、一面ではいたづらつばくふざけたところがあることを、この類の句によつても実証することができるのである。

### (3) 自然風物

自然の草木や生きものを詠んだ句がおかしみを持ち得るのは、芭蕉がその対象に感情を移入し、心あるものに対するような気持で見つめているからである。したがつて芭蕉はその対象に、あたかも人に対するかのように親しさと愛着とを持つていたのである。

道のべの木槿は馬にくはれけり (貞享元年 甲子吟行)

と、今まで目前でほんの一日の命とはいえ美しく咲いていた木槿の花が心ない馬に喰われてしまったことを、何げなく淡淡と表現して、そこに木槿によせるほのかな愛着を表わし、

瘦ながらわりなき菊のつぼみ哉 (貞享四年 續虚栗)

と、ひよろひよろに伸びた菊も秋に至つて荅をつけずにはいられない姿をいとおしみ、

青くてもあるべきものを唐辛子 (元禄五年 深川)

と、秋になつて止むにやまれず赤くなる唐辛子に、青くてもよいものをと少しばかり憤慨の氣をもらして見るのである。

菜畑に花見顔なる雀かな (貞享二年 其便)

初しぐれ猿も小養をほしげなり (元禄二年 猿養)

かくれけり師走の海のかいつぶり (〃 三年 色杉原)

と、雀、猿、かいつぶりを親しく見つめ、

蛸壺やはかなき夢を夏の月 (貞享五年 猿養)

物好や句はぬ草にとまる蝶 (元禄三年 都曲)

いきながら一つに氷る海鼠かな (〃 六年 續別座敷)

と、はかない命へのあはれみを示している。

芭蕉が草木鳥獸を愛するということは、命あるものへのいとおしみに他ならないが、それはまた時にはその命の中に芭蕉自らと

相通じるものを見出すからでもある。「物好や」の句は、句もない草にとまる蝶に、世上の栄達を無視して風雅に遊ぶ芭蕉自身の姿を感じて、「物好や」と詠じ、「青くても」の句は、唐辛子が季節の移り行くと共に止むにやまれず色附いて行くところに、同じく芭蕉自身の止むにやまれぬ風雅への執着を感じていると言える。

このような感情移入による自然の詠じ方は、芭蕉が初期の貞門及び談林俳諧の手法において身につけた見立てや譬喩の方法が底流となつていように思われる。また芭蕉自身の機智に富んだものの見方も、自然を譬喩的に見る手法を一層効果的にしていると言えよう。

以上の検討によつて、芭蕉発句における心のおかしみを特質づけているものの第一は芭蕉の資質であると言える。彼の明るく快活な機智と、子供のように純粹で素朴な感受性とは、芭蕉発句に笑をもたらす重要な要素である。願望体や呼びかけ体の即興詩としての面白みや、多くの秀れた着想は機智の働きのによるものであり、句の軽快な調子や明るい無邪気な表現は童心の表われである。この機智は芭蕉が頭脳明晰であることを示すものである。彼の知的才覚が秀れていたことは、詞のおかしみにおいても述べた通り

である。

第二は彼の人生観即ち無常観である。芭蕉は傍觀的態度でおかしみを表わしているが、それは客觀的写生の態度ではなく、暖いとおしみの眼差が込められた態度である。彼がおかしみを生み出す素材対象の多くは貧しく、わびしく、慎ましいものである。これは芭蕉が人生を無常と感じ、旅と思う故に榮華を虚しいものであるところから、自ずと湧いて出る彼らへの愛着であろう。この眼差が芭蕉自身に向けられた時、それは自らの貧を肯定させ、徇わせる傾向を生ずるのである。芭蕉発句の笑の一つは、この人生觀にもとづいた親しいほほえみであると言えよう。

また芭蕉の句には、悲しいおかしみがある。晩年の芭蕉は旅なる人生を孤独と感じ、老の寂寥をしみじみと身に感じていたようであり、

此の道や行く人なしに秋の暮

(元禄七年 笈日記)

は、この悲しみを純粹に具現したものである。芭蕉のこの感慨が、一句に表現される時、そこに機智と童心とが加わることによつて、その悲しみは明るいおかしみに色どられるのである。

冬瓜や互にかはる顔の形

(元禄七年 西華集)

秋の夜を打崩したる咄かな

(笈日記)

此秋は何で年よる雲に鳥

(笈日記)

秋深き隣は何をする人ぞ

(元祿七年 笈日記)

などは、悲しみとおかしの錯綜を示す句として代表的なものと思われる。「冬瓜や」の句は、冬瓜のどこかおかしな風体に、互いに若い昔とはすつかり変つてしまつた老顔と相通するものを感じているもので、人生の悲しみを思わせると共に、冬瓜を相通させた所に機智の働きのあつておかしいのである。「秋の夜を」の句は、「此句は寂寞枯槁の場をふみやぶりたる老後の活計、なものかおよび候はんとおの感じ申しあひぬ」(『笈日記』)と言う讃辭を送られたもので、ただ寂寞枯槁の場に没するのではなく、それを踏み破つた所に大いに手柄があると云うのであつて、やはり寂寥感と明るい笑が錯綜していると考えられる。すなわち、「打ち崩したる咄かな」と言う表現に芭蕉のさりげない機智の働きの感じられるのである。また「此秋は」の句は老い行く身の細さを吐露したもので、深い寂寥感に溢れているが、「何で年よる」の軽く素朴な表現に微かなおかしみを感じるのである。この句はすでに頼原氏が、「俳諧の最も深い笑が秘められて居ると言つても少しも詭辨ではなからう」(『芭蕉・去來』)と言つておられるのである。さらに「秋深き」の句は、咳くような語りかけの調子で、孤独な人間の、人をなつかしき呼びかけずにはいられぬ心境から生まれて来るものである。この句は『笈日記』によれ

ば芝柏亭へ遣わしたもので、芝柏への挨拶の句とも考えられるが、芭蕉の呼びかけには特定の相手がなく、もつと普遍的な呼びかけであり、むしろ咳きのような調子を感じられる。そして、「隣は何をする人ぞ」と言う少し興じ戯れた表現がおかしきもたらしているのである。このかなしみの中におかしみを持つ句は、芭蕉の至り得た高い詩的境地の一つであると言えるのである。

さらに、晩年の作風かるみとおかしみとは深い結びつきを持っていると思われる。かるみは、単に「淺き砂川を見る如く」さらりとしているのみならず、「腸の厚きところ」より出て「言葉にも筆にもべがたき所にゑもいはれぬ面白き所」あるものでなくてはならない。おもしろみがあると言うことは、そこに喜ばしきもの、心樂しきものを感じ、あるいは興趣や雅致を見出すことであり、おかしきもまたおもしろ味をもたらし一要素として有効なものなのである。かるみの代表的撰集と言われる『炭俵』の

桐の木高く月さゆる也

門しめてだまつて寝たる面白き

を、芭蕉自らが、「炭俵は門しめての一句に腸をすへたり」(『あかさうし』)と述べてこの付句が『炭俵』を代表するかるみの作風であることを自負しているのであるが、この句には洒脱なおかしみが実によく出ている。晩年の作品に見られるおかしきは、こ

のかるみの、巧まずさらりと言いのけて、しかもそこに人の心をひそかに魅するおもしろみのある作風からもたらされているものが多い。かるみは、広い意味でおかしの精神につながるものと考えられ、笑がその一端になっていると言えるのである。

### 三 結 び

芭蕉の発句に見出せる笑について、その発句に徴することにより、詞のおかしみと心のおかしの両面から検討してみた。その結果、芭蕉発句における笑は、芭蕉の資質的な明朗さと機智的才覚とがその一端をにない、さらに芭蕉の人生観、すなわち彼が人生経験のうちに感じ取った無常感に基づく人間や自然へのいとしみの感が他の一端をになっていると考えられる。この両者の融合の割合によつて、そこに様々なニュアンスの笑が生ずるのである。その中でも高く評価し得るのは、「かなしいおかしみ」である。ここには詩として高く評価されるだけの深く強い感動、あるいは感慨が籠められており、その上に添えられたおかしみがこの感動をより深くする作用をしているのである。また明るい童心の句も高く評価したい。そこにはごく自然にはほえまされる楽しさがある。

さて芭蕉発句のうち、おかしみを示すものは全発句中約半数を

指摘しうるのであるから、おかしみは芭蕉発句の特質として十分強調し得るものである。この特質が芭蕉の個人的な資質によるものであることは先にも述べたのであるが、それと共に芭蕉の生きた時代の特質をも大いに反映しているものと思われる。貞門談林の滑稽文学の中に芽を吹いた芭蕉は、元禄文化共通の洒脱な面を持つている。彼は西行を慕い、長嘯子を繙いているが、彼を中世的隠遁者と見ることはできないのである。芭蕉は、やはり元禄時代の洒落洒脱の中に生き、人を笑わせ、自らを笑い、その中で自らの作品を高い境地へと進めて行つたのである。

芭蕉の機智的才覚は、今日まであまり問題にされていないが、これは彼の作品を特色づける重要な要素であり、芭蕉を本当に理解するための一つの鍵であると思う。この機智的才覚は、彼の書簡及び俳文、並びに門弟の残した俳書類によつて、より明らかにすることができ、ここでは省略する。

芭蕉の俳諧は、このおかしみによつて蕪村以後今日に至るまでの俳句を遠くへだてているとも言える。このおかしみは、蕪村の生み出し得なかつたものであり、また子規以後の今日の作家にも見出せぬものである。今日の人間の失いかけているものを芭蕉に見出して、はつとせすにはいられない。そしてまた、今さらながら芭蕉の器の大きさと、悠然と人生に対し、十分に人生を楽

しむ態度とを再認識するのである。

(昭和三四 日文卒 本学図書館員)